

〔 一般教養科 〕

〔 区 分 A 〕

鹿毛 敏夫

中世港町佐賀関と海部の海民文化

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

日本中世の西国社会 3 西国の文化と外交（清文堂）、pp237-258、(2011. 12)

平成の市町村大合併により地理上の地名から消えた海部（あまべ）地域の歴史と伝統を、どこまで記録に残すことができるであろうか。本稿では、数少ない中世の文献史料に、考古学や民俗学の成果を部分的に取り込み、更には、絵画史料からの考察も展望しながら、歴史の記憶から消えかけようとしている中世豊後国海部地域の海民文化とその中心的港町佐賀関の往時の様相を復元した。

鹿毛 敏夫

《抗倭図巻》、《倭寇図巻》和大友義鎮、大内義長

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

中国国家博物館館刊 2012-1（中国国家博物館）、pp39-51、(2012. 1)

《抗倭図巻》和《倭寇図巻》の画師特意在侵犯中国沿海的倭寇船只的旗帜上注明“弘治”这一日本年号，其绘画主题不言而喻是要表现“弘治”年间从日本渡海到中国沿海进行走私贸易和掠夺的倭寇船队。《明世宗实录》、《日本一鑑》以及日本残存的有关日明往来的史料表明：这一期间数次至中国进行大规模倭寇活动的正是日本战国诸侯大友义镇和大内义长派遣的船队。其船队拥有“巨舟”、持有“弘治”年号的“日本国王之印”的印文到明朝请求朝贡，对于明朝的海防官兵形成了极大的威胁。实际上，在朝贡遭到拒绝的瞬间，他们就流露出倭寇的本来面目，辗转防卫薄弱的地区，与王直等勾结进行走私贸易，并在交易被拒绝时转而为盗。就是为了对付日本的“弘治”大倭寇，工部侍郎赵文华和浙江总督胡宗宪在嘉靖三十六年（弘治三）将中方的头目王直捕获，又于翌年成功地驱逐了与王直勾结的大友义镇使僧德阳和善妙等人。《抗倭图卷》和《倭寇图卷》这两幅图卷描绘的内容都是明军击退日本“弘治”年间的来犯的一系列倭寇，终结“嘉靖大倭寇”的丰功伟绩。虽然自此无法判断其制作人是赵文华还是胡宗宪、或是其他人物，但至少可以断定为明军所镇压的“弘治”倭寇船队属于大友义镇和大内义长等当时称雄西日本地区的战国诸侯。

木本 伸

デーリウス『僕が世界チャンピオンになった日曜日』試論

— 神の檻からの解放，牧師館の息子が駆け抜けた思想史のドラマ —

木本伸*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

ドイツ文学論集，44号，日本独文学会中国四国支部編，pp.32-47，(2011.10.)

デーリウス『僕が世界チャンピオンになった日曜日』の作品解釈である。

佐渡 一邦

Finiteness and the Thematic Structure

佐渡一邦*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

甲南英文学 No. 26 、 pp. 57-70、 (2011. 7)

体系機能文法においては「節」を「主題+題述」の2つの部分から構成されているとしている。主題になる無標の要素は節の法の種類によって違うことが指摘されている。不定型節にも主題構造があることについてはコーパスをもとに確認した。主語と定型動詞は節の法を決定する部分であり、その要素である定型動詞を欠く不定型節の主題になるべき要素には、有標・無標の区別が存在し得ないことを指摘した。

[区 分 B]

野口 裕子

円地文子事典

野口裕子* (分担執筆)

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

芸術至上主義文芸学会企画・編集 鼎書房発行 8項目執筆 (2011. 4)

円地文子の作品、円地文子に関する事項・人物について網羅した文学事典である。分担執筆したのは小説『小町変相』、随筆『兎の挽歌』『古典夜話』のほか佐多稲子や衣服など8項目である。円地の小説や戯曲についての評論は多いが、随筆について書かれたものは少ないので、この事典は円地文子研究の指標となるものである。『兎の挽歌』については配列についての分析もした。『古典夜話』は白洲正子との対談集で、円地の古典についての造詣の深さを再評価した。

鹿毛 敏夫

アジアン戦国大名大友氏の研究

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

吉川弘文館、(2011. 11)

九州豊後の大友氏は、大陸に近い地の利を活かして、13～16世紀にわたり、中国や東南アジアを意識した政治・外交・経済・文化的政策を実行した。戦国大名の政権定義の枠組みをはるかに越え、「アジアン大名」としてのグローバルな志向性をもった国際的地域政権の営みを、日本・中国・インド・ポルトガルに残る史料・絵画・遺物などから解明した。

[区 分 C]

鹿毛 敏夫

中世「唐人」の存在形態

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

アジアン戦国大名大友氏の研究 (吉川弘文館)、pp103-137、(2011. 11)

16 世紀の中世日本社会に渡来した中国人たちは、九州を中心とした西日本各地の所縁の地に居住し、唐人町というコミュニティーを形成しながらも、決して孤立・閉鎖的なマイノリティー集団に没することなく、在来日本人との血縁関係を深め、更に近隣町人との交流も深めながら、当該期日本社会に同化していった。彼らは、例えば、顔料に精通し狩野永徳に唐絵技法を伝授した樹岩見山に象徴されるように、自らが有する高度に専門的な能力を通して、当該期日本で期待された社会的役割を果たすとともに、少なくとも 16 世紀においては、文化・文明の先進地である中国からの技術伝道者としての社会的地位を確立していった。しかも、中世日本社会における彼らの存在と活動は、単なる職業的スキルや技術の伝播のみでなく、彼らが当該地域社会に精神的な部分にまで深く同化する意識を有していたことによって、大名権力から一般民衆にいたる日本人のより幅広い階層に受け入れられながら、文化的融合を深めていったことを明らかにした。

鹿毛 敏夫

日元禅僧の国際交流と大友氏

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

アジア戦国大名大友氏の研究（吉川弘文館）、pp152-173、(2011.11)

制度としての外交システムをいまだ持ち得ていなかった中世の時代、外交業務は専門技能として未分化の状態にあり、国家や地域公権力による禅僧を介しての諸外交活動は、彼らの宗教的活動や学問・芸術活動とも密接につながっていた。本稿では、九州の有力守護大友氏の対元外交に焦点をあて、禅僧を介した外国交流が 14 世紀の鎌倉・南北朝期にどのように進められていたかを考察するとともに、最後には、地域の大名権力が強大化する 16 世紀にそうした禅僧の存在形態が社会的にどう変化していくかについても展望した。

鹿毛 敏夫

ポルトガル人が描いたザビエルとアジア・戦国日本

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

アジア戦国大名大友氏の研究（吉川弘文館）、pp188-224、(2011.11)

ポルトガルの首都リスボンのサン・ロケ教会の主祭壇の左手を奥に進むとサクリスティ＝聖具室がある。天井にイエズス会の紋様をあしらった装飾を施した室内の壁面には、数十点の額装絵画がはめ込まれており、その絵画群のなかに、画家アンドレ・レイノーゾとその一派による 20 点の連作油彩画が存在している。レイノーゾとその一派の手によるこの連作油彩画については、ポルトガル美術史の視点からヴィートル・セラン氏による考察がなされているが、歴史学の観点からの分析はいまだなされておらず、また、日本においてはその画像すら広く周知されているとは言えない。本稿では、2009 年と 2010 年に実施した現地調査の成果に基づいて、アンドレ・レイノーゾとその一派による Life of Saint Francis Xavier の 20 点の連作油彩画の全貌画像を紹介し、その画像一点一点を読み解きながら、ザビエルのアジア宣教活動の足跡を振り返るとともに、画像に潜む 17 世紀初頭ポルトガル人のアジア認識について考察した。

鹿毛 敏夫

アジアから見た豊後大友氏

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

大分合同新聞、(2006. 6. 17～2012. 3. 18)

九州の戦国大名大友氏が活動した15・16世紀は、世界史上の大航海時代に相当する。この時代、西日本各地の地域権力は、日明・日朝関係を軸に自らも主体的なアジア外交を展開し、東アジアには環シナ海交流圏とも呼べるマクロな文化圏が形成された。海域交流史における近年の活発な研究蓄積の成果を一般向けに広く還元するために、新聞紙上の連載企画として、中世日本の歴史をアジア諸国との関わりのなかで叙述する記事を2006年度から引き続き執筆した。今年度分の連載は、以下の19テーマ。4/3「ザビエルとポルトガル国王」、5/1「インドでのザビエル」、5/15「ザビエルの布教活動とインド・日本」、6/19「ザビエルのミサ」、8/7「大友使節の北京入京」、8/21「紫禁城での皇帝謁見」、9/4「皇帝と遣明使」、9/18「皇帝の玉座と曆」、10/2「皇帝行幸の見学」、10/16「夜の北京」、11/6「朝貢と異文化交流」、12/4「『倭寇』国際共同研究のはじまり」、12/18「鄭舜功の豊後上陸」、1/8「倭寇を謝罪した宗麟」、1/22「九州に広がったBungo」、2/5「大内義長が捺した日本国王印」、2/19「偽造した日本国王印」、3/4「元寇から朝鮮出兵まで」、3/18「アジア戦国大名大友氏の研究」。なお、2006年度から6年間にわたり隔週で執筆してきたこの連載は、3/18の第115回で完結終了した。

野田 善弘

遠藤石山の思想

野田善弘*

* 新居浜工業高等専門学校一般教養科

新居浜工業高等専門学校紀要第48巻、pp37-42、(2012. 1)

遠藤石山(1832～1907)は、明治2年に漢学塾稽崇館を新居浜泉川に設立し、地域の教育に力を注いだ。本稿は、石山が著した「大学提綱」(広瀬満正編『石山遺稿』所収)を中心として石山の儒学思想について論じたものである。西洋化に抗い儒学・漢学を重んじる石山であるが、その思想は決して守旧反動的なものではない。既成観念にとらわれず、事業実践を重んじる石山の思想は、広瀬幸平をはじめとする実業家にも支持され、次世代の指導者たちを育成し、新居浜の発展に大きく寄与したのである。

竹原 信也

別子銅山社宅街(鹿森・東平)における昭和の生活史

竹原信也*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

新居浜工業高等専門学校紀要第48巻、pp. 43-50、(2012. 1)

本論文は、2010年度に行われた「別子往還道プロジェクト～記憶の継承・地域の絆～」事業の概要を紹介するとともに、事業での記録をもとに、昭和期における別子銅山を中心とした新居浜地域での生活文化を記述するものである。特に、別子銅山の山間部社宅街である東平(とうなる)地域と鹿森(しかもり)社宅での生活文化に着目し、その様相を記述した。分析の結果先行研究が示す(1)山間部といえども社宅街ならではの恵まれた生活、(2)貧しい暮らし・厳しい仕事及びそれらに影響を受けた生活様式、(3)強い連帯の精神といった山間部社宅街の特徴は、本調査においても同様であり、危険な仕事で、貧しい生活の中、相互扶助の精神のもと、助け合って生活していたことがわかった。ただ、生活という観点からは、必ずしも厳しい毎日だけではなく、人や物の往来があり、日用品に不自由していたということもなかった。人々は現実を受容し、娯楽や運動を通じて生活を楽しんだ。そして山間部社宅街での生活には、労働者が危険な仕事に従事した人々も厳しい生活をしてきたが故の“大らかさ”や“寛容の精神”が存在していたこともまた窺えるのである。

このように、本報告は「社宅やそれが作りだす街は、生きられた空間として、はるかに多様な要素を内部に抱えている」（社宅研究会編著『社宅街 企業が育んだ住宅地』学芸出版社（2009）、p.232）ことを生活者の証言からも示すことができた点で意義がある。

〔 区 分 D 〕

木本 伸

ブレーメンでの生活

木本伸*

* 新居浜工業高等専門学校一般教養科

広島ドイツ文学第 25 号、広島ドイツ文学会編、pp.70-74、(2011.7.)

<http://hiroshimadeutsch.web.fc2.com/07.html>

筆者は 2006 年 3 月から 12 月まで国立高専機構の在外研究員としてブレーメン大学に赴任した。その際の生活を振り返り、ブレーメン市を紹介するエッセイである。

〔 区 分 E 〕

鹿毛 敏夫

戦国大名大友氏と「南蛮」国

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

日本貿易陶磁研究会大会（大分県立芸術文化短期大学）、（2011.9）

16 世紀後半から 17 世紀に繁栄した日本各地の南蛮交易都市を文献史学の立場から紹介するとともに、戦国日本の流動的な内部構造に即した時代認識から、遣明船の派遣に象徴される室町幕府のアジア外交のなかに島津氏・大友氏・松浦氏・大村氏などの戦国大名の「南蛮交流」の姿を浮きあがらせ、さらに、豊臣政権から江戸幕府にかけて進展する国家的「南蛮交流」への転換を描いた。

鹿毛 敏夫

大友氏の魅力

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

大友氏フォーラム（大分市）、（2011.9）

NPO 法人からの依頼を受け、同フォーラムにおいて、戦国大名大友氏に関わる最新の研究状況と、同氏の海外交流、水軍編成、キリスト教受容、遺跡発掘の現状等を画像資料を交えて紹介し、また、遺跡や人物顕彰の課題、問題点や展望について講演した。

鹿毛 敏夫

「倭寇図巻」「抗倭図巻」と大友義鎮・大内義長

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

東京大学特定共同研究「倭寇像の比較」国際研究集会（東京大学）、（2011.10）

東京大学史料編纂所で開催された同国際研究集会において、日本と中国に現存する2点の倭寇絵巻の内容を文献史料に即して分析し、両絵巻が、弘治年間の日本から中国に来航した一連の倭寇を撃退して嘉靖の大倭寇を終息させた戦功の記録として中国で描かれたものであり、絵巻のなかに描かれる、中国官軍によって鎮圧された「弘治」の倭寇船を派遣したのは、大友義鎮や大内義長等の当該期西日本で勢力を誇った戦国大名であったことを明らかにした。

鹿毛 敏夫

16世紀的九州大名與天主教遺跡

鹿毛敏夫*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

台湾中央研究院「近世東亞海域史の多視角研究」国際工作坊（台湾中央研究院）、（2011.10）

因天主教大名大友宗麟，以豊後為根據地開花結果的天主教文化，是日本天主教文化的起點。然而在過去的研究中，以西文史料為主的西洋史研究者陳述的豊後天主教文化，與著重日本國內史料の日本史研究者，兩者對於其時代和社會認識上有相當大的分歧。近年，在填補此分歧上扮演重要角色的正是豊後府内和白杵兩地的考古學成果。藉由這十多年來正式的發掘調查，原是平行線的時代面貌漸次相互整合。為使該門研究能夠更為深入，除了文獻史學-考古學問學問分野の串連外，以日本史-亞洲史-西洋史同一時代空間的研究視野，今後將更為重要。

木本 伸

ガンゼル『ウェイブ』試論

木本伸*

* 新居浜工業高等専門学校一般教養科

日本独文学会中国四国支部学会研究発表会（高知大学）2011年11月5日

本論は2008年のドイツ映画、ガンゼル監督『ウェイブ』（Die Welle）の作品解釈である。